

深呼吸

田宮ヨシノリ

登場人物

木島

前田

鈴木

神保

上地

第0場

夕方。公園。ベンチに木島が座っている。その隣には電灯。その電灯にもたれかけている前田。

前田 なあ。

木島 何。

前田 やっぱり痛いかな。

木島 痛いよ、そりゃ。

前田 だよな。

木島 ……なに、びびってんの？

前田 びびっ……るだろやっぱり普通はさ。

木島 だっさい。

前田 だっさくない。

木島 だっさいだろバカ。

前田 怖いだろ普通、針とかプスプスすんだよ、最悪だろ。

木島 じゃあやめなよ。

前田 ……言っちゃった。

木島 何？

前田 それは言っちゃあだめだろ。

木島 何が。

前田 そういうこと言っちゃったら、もうやめれないじゃん。

木島 やめれるじゃん。

前田 やめれないよ、もう。

木島 意味わかんない。

前田 今お前がやめればって言ったことによって、やめる選択肢がなくなったんだよ。

木島 はあ？

前田 だから、お前が、今、やめればって言ったことによって、俺のやめるっていう選択肢がなくなったの。

木島 聞いたよ。

前田 ダサいでしょ。やめればって言われてやめるの。

木島 そうかな？

前田 そうだよ。

木島 じゃあ、さっきまではやめれたの？

前田 何が？

木島 だから、私がやめればっていう前には、やめれたの？

前田 ああ……。どうなんだろう。やめれたのだろうか。

木島 やめれなかったの？

前田 ……うん、多分。

木島 うん？

前田 や、

木島 じゃあ、もうやめるっていうのはないじゃん。

前田 そうだね、やめるっていうのはないね。

木島 何それ。

前田 うん。もう今日になっちゃったから。

木島 はあ？

前田 今日になった時点でもうダメなの。やめるっていう分岐は昨日までで、昨日決めた、あの時点で、決めちゃったらもう、ないの、その先は。

木島 なんて？

前田 なんて？なんだろう。……なんだろう、昨日の自分をむげにできないし。

木島 なんだろうって2回言った。

前田 あ。

木島 変なの。

前田 うん。

木島 そういうところ。

前田 何？

木島 そういうところ、いいよね。

前田 ……意味わかんない。

木島 私先にやってもらおっかな。

前田 ええ。

木島 嫌なんじゃないの？

前田 嫌だけどさ、なんか痛そうなの見てるのも嫌だもん。

木島 ……。

前田 タトゥーなんて絶対グロいし。映像見たけどさ、リアルで見たらもう、ちょっと耐えられないかも。

木島 ほんとめんどくさい。

前田 順番はさ、行ってから決めようや。感じで。

沈黙。子供の遊ぶ声が聞こえる。

木島 痛い方がいいよ。

前田 え？

木島 痛くないと意味ないよ。

前田 ……そうかもね。

木島 こけたら痛いでしょ。

前田 痛い。血も出るし。

木島 痛い。

前田 でも治るよ。

木島 だからまた転ぶ。

前田 確かし。

木島 子供がさ、

前田 うん

木島 走ってて、転んだりするじゃん。

前田 あるね。

木島 あんまり痛そうじゃないよね。

前田 どうかな。

木島 思い出せる？

前田 え……どうかな。

木島 膝がさ、地面と近いんだよ。

前田 背が低いからね。

木島 体重も軽いし。

前田 うん。

木島 だから、転んでもトテツみたいな感じで。

前田 でも、転んだら泣くでしょ子供って。

木島 確かにね。

前田 痛いんだろうか。

木島 痛かったんだっけ？

前田 どうだっけね。忘れちゃった。

木島 痛くて泣いてるのかな。びっくりして泣いてるだけじゃない？

前田 何に？

木島 だから、転んだことに。

前田 ん？

木島 こう、歩いてるでしょ。まっすぐ。自分の目で見えている映像はまっすぐで、このまま歩いたらこうなるっていうのまでなんとなくわかる。でも、それがなんかいきなり、地面になる。トテ。真っ直ぐ見えていたはずなのに、それが気づいたら地面になっていて、……大きな壁。急に壁。それで、びっくりしちゃうの。びっくりして泣いちゃうのよ。

前田 子供が？

木島 子供が。

前田 難しすぎるだろ。

木島 なにが？

前田 こう歩いてて、どんってなって、うわ地面だ、うわなんでもうわからんうわ
1、ってことでしょ。言い方むずすぎるよ。

木島 そうかな。

前田 そうでしょ。

木島 子供は意外と頭いいと思うよ。

前田 そうか？

木島 前田よりは賢いよ。

前田 なにそれ。

木島 高校行ったら勉強しなよ。

前田 は。

木島 大学行くんでしょ。

前田 ……そんな先の話するなよ。

木島 ……行こうか。

前田 え、もうそんな時間。

木島 うん。

前田 ……なんかもう痛い。

木島 意味わかんない。

第1場

夜。深い深い山の中。鈴木が穴を掘っており、サクサクと音を立てている。
神保はそれを座って見ている。

神保 山派か海派かって、あるじゃん。

鈴木 (手を止めて) ……はい。

神保 あと、犬派か猫派か。

鈴木 ……。

神保 あと、中華かイタリアン。鈴木くんはさ。

鈴木 はい。

神保 こういうの聞かれて、イライラするタイプ？

鈴木 イライラ、します、かねー。

神保 あ、そうなの。

鈴木 あ、そうでもないですかね。

神保 そういう、あれだよね鈴木くんって、合わせたよね今。

鈴木 え？

神保 話。会話の流れで決める人だよな。

鈴木 ……。

神保 まあ、別にどっちでもいいんだけどさ。俺、するのよ、質問。初めて会った人とかは特に。こういう質問って、どっちでもいいじゃん。だって犬にも猫にもいいところあるし、餃子も好きだし、ピザも好きだし。こう、基本的にどんな人にも話せる

事だし、相手とわざと反対の立場にも立てるし、大人数ならそこそこ盛り上がるじゃん。でもだよ、そういう時に、そういう質問ってどっちでも良くないですかっていう奴いるじゃん、そんな場が盛り下がって、なんかこっちも気まずいみたいな感じになるの意味わかんないんだよね。だってさ、こっちはもうそれ込みでやってるわけじゃん、なのにあっさい所の考えで、言ってくんのよ。いるんだよ、そういう奴がさ。

鈴木 あの。

問

神保 ん？

鈴木 ……いや。

神保 ……そんでさ、鈴木くんとは俺、あんまり、親しいわけでもないじゃんか。

鈴木 そうですね。

神保 鈴木くんってさ、焼肉行ったら、最初に何焼く？

鈴木 え、まあ、普通に考えたらタンじゃないですか？

神保 あ、出たよ、普通に考えたら、って言っちゃったよ。

鈴木 え？

神保 それはさ、本当は最初にタン食べたくないけど、まあなんか世間的には最初はタンかなあみたいなの妥協が生んだ答えって事なの？

鈴木 ……タン以外は最初はないです、多分。

神保 わかる。やっぱりそうだよなタンだよ。みんなタンだもん。あ、うちさ、実家焼肉屋なの。

鈴木 へー。

神保 そう、あの、チェーンとかじゃなくて、よくある町のきつたねえけど、うめえ焼肉屋。で、俺も昔はよく手伝ってたからさ、注文とか取るわけ、そしたらさ、みんなタンなの最初は。そんでこっちもさ、大体もう最初にタン出す準備するわけよ。でも、たまにさ、いるのよ、最初にカルビとか頼んじゃう奴。とりあえず生つつて、そんでカルビ2人前とかいう奴。まあ、でも結局タンも頼むから、こっちは最初にタン持ってくじゃん、そしたらそれ待って、カルビとかから焼く奴いるんだよ、たまに。一緒にいる奴はどう思ってたんだろうね、目の前でカルビ焼き出す奴見て。寿司屋行つてさ、いきなりマグロ食う奴だよなそういう奴は。ラーメンの一口目がチャーシューなんだよそういう奴は。

鈴木
……。

沈黙。鈴木、穴を掘る作業に戻ろうとするが。

神保 山ってなんなんだろうね？

鈴木 ……なんすか。

神保 山って、でかいよね。

鈴木 でかいですよ、そりゃ、山だもん。

神保 でも、俺ほとんど山とか行ったことないんだよね。不思議だよな。

鈴木 俺もないですよ。

神保 山、どれくらいあるか知ってる？

鈴木 ……どういう意味っすか？

神保 山が、どれくらいあるか、知ってる？

鈴木 ？

神保 日本って、80%が山らしいよ。

鈴木 ああ。

神保 不思議だよな。

鈴木 ……。

神保 こんなに山ばっかのところに住んでのに、実はすぐ近くに山ってあるのに、ほとんど知らない場所なんだよね。

間

神保 山派か、海派か聞いたっけ？

鈴木 ……いや。

神保 どっち？

鈴木 まあ、どっちかって言ったら、海ですかね。

神保 海かゝ、海なゝ。怖くない？

鈴木 え？何がですか？

神保 海ってさ、まだわかんないことたくさんあるって言うじゃん。潜水艦とか、未だに限界あるらしいし。

鈴木 ああ、まあでも、それは山も一緒じゃないですか。

神保 ん？

鈴木 今、これ掘ってますけど、誰もこの中、この山自体の中身、知らないでしょ。って言うか、知らないから、ここにわざわざ来て、これ掘ってやってるわけで。なんか、いや別にいいんですけど、ちよつと、俺今疲れてて、なんかあんまり喋りたくないと言うか、ちよつと、どうでもいいんですよ今は。山派でもいいですよキャンプとかするし、焼肉もホルモンから食う奴が居てもいいし、なんなら、僕はラーメン、チャーシュー先に食べますよ。おいしいじゃん！チャーシュー。今、あんまり考えたくないんですよ。穴掘ってるんで僕。穴掘らなきゃなんで、はい。

神保 ……。

鈴木 すいません。

神保 一緒じゃないよ。

鈴木 え。

神保 山と海。

鈴木 ……。

神保 ほとんどの山にはね、管理している人がいるのよ。その人が、定期的に見に来るわけ。海はね、無理でしょ。そもそも行けてないんだから、海底まで。どこまでが誰の範囲かもわかんないし、でも山は広いつつも見えるから。見えてるからさ。管理できんのよ。

鈴木 は？

神保 うん。

鈴木 え、じゃあ、どうするんですか？

神保 うん？

鈴木 ここ、埋めるんでしょ。

神保 あ、ここ。ここは大丈夫だよ。

鈴木 え。

神保 うん。大丈夫だからさ、埋めたらもう見つからないと思う。

鈴木 ……。

神保 鈴木くんは捕まりたくないんだね。

鈴木 え。

神保 いや、いいと思うよ普通は嫌だよ、やつぱり。捕まらないなら、捕まらないほうがいいよ。

鈴木 ……。

神保 あ、疲れたら変わるよ。

鈴木 ……はい。

第2場

昼間。公園。ベンチに座っている前田と木島。前田はファストフード店の飲み物(紙コップにプラスチックの蓋が付いている)をストローで吸っている。が、中身がほとんど残っていないので、シュゴーシュゴーと音を立てている。

木島 やめなよ。

前田 (ストローから口を離して)何を？

木島 その、シュゴーシュゴーってストロー吸うの。

前田 なんで？

木島 不快でしょ。聞いてらんないでしょ。

前田 そうかな？

木島 そうです。

前田 そう？

木島 お父さんの爪切りの音がリビングに響き渡ってるくらい不快。

前田 それは、言い過ぎだろ。

木島 しかも親指ね。

前田 嫌だな、分厚そう。

木島 何が？

前田 だから、そのお父さんの足の親指の爪。

木島 うわ、きつも。

前田 うわ、きもいな。

木島 ほんとサイテー。

前田 お前が言い出したんだろ。

木島 前田がシュゴシュゴ吸ってるからでしょ。

前田 いいだろ。シュゴシュゴしてもおいしいんだから。

木島 おいしいわけじゃないでしょ、そんな残りカスみたいな。

前田 バカ言ってるんじゃないよ。この残りの氷がね溶けることによって、これ、永遠に飲み続けられるんだよ。

木島 薄いでしょ。普通に考えて。

前田 薄いよ。

木島 じゃあ、おいしくないでしょ。

前田 おいしくとかじゃないから。

木島 さっき、あんたがおいしいって言ったんでしょ。

前田 言ったか？

木島 言ったよ。

前田 ほんと……。おいしくはないわ。

木島 ばか。

沈黙。前田、ストローで吸うのは諦めた。ので、飲み物の蓋を開けて、氷をゴリゴリ食べ出す。

木島 あのさ。

前田 (思ったより口に氷が入ってしまい上手く喋れない)なに。

木島 そんなに氷食べたい？

前田 (モゴモゴ)え。

木島 いや、まあいいんだけど。

前田 え、これもダメ？

木島 ダメじゃないけどさ。

前田 うん。

木島 なんか、さっきの今だし……。なんか。

前田 なんかって二回言った。

木島 そう？

前田 うん。

沈黙。紙コップの中には氷が残っているけれど、前田は食べない。

前田 友達ができない。

木島 え。

前田 高校に入れた方がいいが友達ができない。

木島 ……そう。

前田 え、氷食ってるから？

木島 え？

前田 氷食ってるから友達できないのかな。

木島 どういうこと？

前田 不快なんですよ。

木島 いや、それはさ、

前田 いいのよ、別に。それを今後ちゃんと直していけばいいからね。今、指摘されて良かったよ。直せばね、いいからね。それだけの話だから。うん。

木島 ……大丈夫よ。

前田 え？

木島 友達できるよ。もうちよつとしたら。

前田 根拠がないな。

木島 転勤族の私が言うんだから、間違いない。

前田 そうだっけ。

木島 そうよ。友達作りのエキスパート。

前田 友達いなかったじゃん、中学ん時。

木島 超失礼。

前田 いたか。

木島 いないけど。

前田 なんじゃそりゃ。

木島 悪い？

前田 え、引っ越してどんな感じなの。

木島 何が。

前田 ワクワクすんの？

木島 引っ越したことないの？

前田 うん。

木島 ……全然ワクワクしないよ。

前田 そう。

木島 なんかね、習い事を転々とする感じ。

前田 わかんない。

木島 習字を頑張るでしょ。とめはねはらい。スミなんか擦ったりして、賞とか取ったりして。そしたらね、次はプール。バタ足から始まって、クロール、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライ。

前田 めっちゃ泳げるじゃん。

木島 泳げるようにはなるし、字も上手くなるけど、次はそろばん、みたいな。次で

はもうなんにもならない。

前田 そういうもんかな。

木島 残念。

前田 別に残念じゃないけど。

木島 また引越すの。

前田 え。

木島 うん。

前田 ……そっか、引越しか。

木島 うん。

前田 寂しくなるね。

木島 そうだね。

第3場

高校の手洗い場。鈴木が水の入っている水槽にネットのような物を突っ込んで汚れを掬おうとしている。その横にいる前田。

鈴木手を止めて。

鈴木 焼そばパンって、誰が考えたんだろうね。

前田 え。

鈴木 美味しいよね。

前田 ああ、まあ。

鈴木 ……前田はさ、犬派？猫派？

前田 え。……どっちでもないかな。

鈴木 あ、そう。ま、別に俺も、どっちとかでは。

前田 ……関西人。

鈴木 え？

前田 焼そばパン考えたの。

鈴木 え、あ、え！そうなの。

前田 だと思う。

鈴木 え？

前田 炭水化物に炭水化物だから、なんか関西人が思いつきそうって思った。

鈴木 あ、あゝ、なるほどね。

前田 気になるの？

鈴木 何が。

前田 え、だから、焼そばパン誰が作ったのか。

鈴木 あ、いや、別にそういうわけじゃないけど。

前田 そうなの。

鈴木 ま、美味しいからね、気にならないわけじゃ、ないけどね。関西人ね、確かに。

前田 ……確かに美味しいよね、焼そばパン。

鈴木 ね、そうよね。みんな好きだよね焼そばパン。あれ、購買のさやつ食べたところ？

前田 ない。

鈴木 あ、そう。あれ、弁当？

前田 うん。

鈴木 あ、そうなんだ。

沈黙

鈴木 あ、のさ。

前田 うん。

鈴木 前田ってさ、腰のところに刺青入ってるでしょ。

前田、慌てて自分の後左腰側を見る。

鈴木 あ、別に、今見えているとかではなくて、ほら体育の授業でさ、着替えの時に、チラッって見えちゃってさ、

前田 ……あ、そう。

鈴木 うん。

前田 ……見る？

鈴木 え。

前田 あ、いや、

鈴木 いいの。

前田 うん。

鈴木 え、まじか。

前田、背中を鈴木に見せようとする。

鈴木 うわ、なんか緊張する。

前田 なんだだよ。

前田、制服の後ろを捲り上げる。

鈴木 羽だ。

前田 そう。いいっしょ。

鈴木 おう、なんかかっこいい。

前田 でしょ。(前を向き直して)本当はさ、この両肩にさ、和柄のやつ入れようと思っただけど、止められてさ。

鈴木 いつ入れたの？

前田 あー、中学卒業する時。

鈴木 一人で？

前田 いや、もう一人別のやつと。

鈴木 へー。

前田 鈴木も入れたら？

鈴木 いや、俺はいいよ。

前田 そう。

間

前田 鈴木はさ、何が好きなの？

鈴木 え？

前田 あー、動物。

鈴木 ああ。……どうだろ。……メダカとか？

前田 へー。

鈴木 まあ、水槽洗ってるし。

前田 たしかに。

鈴木、ネットのようなもので水槽の汚れを掬う。

鈴木 前田はさ。

前田 うん。

鈴木 好きな動物は？

前田 うーん。魚で言うとか、

鈴木 魚じゃなくてもいいよ。

前田 サンショウウオ。

鈴木 サンショウウオ？

前田 知ってる？

鈴木 知ってるけど、魚じゃなくね。

前田 確かに。でもなんかかつこかわいくね。

鈴木 近くに水族館あるじゃん。

前田 ああ、駅の隣の？

鈴木 サンショウウオフェアやってるよ。

前田 何それ。

鈴木 わかんない。ポスター貼ってるの見た。

水槽に残っている水がチャプチャプと音を立てる。

前田 ……水。

鈴木 え。

前田 なんで捨てずに洗ってたの？

鈴木 ん？

前田 (水槽を指して)水、捨てた方が洗いやすいでしょ。

鈴木 ああ。

前田 ね。

鈴木 捨てれないんだよ。

前田 ん？

鈴木 水、完全に入れ替えたなら魚が弱っちゃうの。

前田 ……。

鈴木 この残ってる水にはさ、なんか色々蓄積されてて、それを完全に変えちゃうと環境変わりますぎてダメなんだよ。

前田 へー。

鈴木 意外とね、こっちもちゃんと気を使わないといけないのよ、動物って。

前田 大変だね。

鈴木 まあ、（魚を指して）こいつらよりマシだよ。

第4場

夜。外。木島と前田が電話している。

木島 で。

前田 うん、バレた。

木島 まじか。ださ。

前田 いや、結構気をつけてたんだけどさ。

木島 よかったじゃん。

前田 え？

木島 友達できて。

前田 いや、別に……。きっと明日にはスツとしてるよ。

木島 そんなに寂しいなら、前田から話しかけなよ。

前田 いや、それは厳しいだろ。

木島 そうかな。

前田 無理だよ。

木島 そうだね。

前田 今更、だし。

木島 意地っ張り。

前田 うるさい。思春期、人はナイーブなんだよ。

木島 思春期に限らないよ。

前田 え。

木島 人は一生ナイーブ。

前田 そうかな。

木島 だからどんどんしんどくなる。

前田 ……お前さ。

木島 なに。

前田 ネガティブだね。

木島 ……低気圧だから。

前田 関係ないだろ。

木島 ……電話っていいね。

前田 なに？

木島 電話は素晴らしいよ。

前田 そう。

木島 人類の発明で一番すごいかも。

前田 言い過ぎだろ。

木島 一位電話、二位エアコン、三位こたつ。

前田 バカなランキング。

木島 同じ場所にいないのに喋れるって、なんか不思議。っていうか、きもい。よく考えたらきもい。

前田 ひどいな。開発者の気持ちを考えろよ。頑張ったと思うよ。

木島 そう？

前田 そうだろ。すごいだろ、電話作るって。っていうかすごいかわかんないけど。

木島 どうしてだろ。

前田 うん？

木島 動機はなんだったんだろ。

前田 そりゃ遠くの人と話せたら色々便利だろ？

木島 でも、ほんとには会いたいんじゃないかな？

前田 なに。

木島 最初は瞬間移動の研究をしたんじゃない？それで、いや、こいつは無理だ。厳しい。せめて会えなくても会話を、会話をするんだ！っていうとんでもない努力の塊が電話なんだよ。

前田 なんか、瞬間移動よりはできそうだもんね。

木島 この世に瞬間移動を諦めてない人がいたらいいな。

沈黙

前田 なあ。

木島 何？

前田 水族館行こうよ。

木島 なんで。

前田 今日そんな話になったんだよ。

木島 水族館の話？

前田 両性類の話。

木島 なんだそれ。

前田 サンショウウオ。

木島 えー、カエル？

前田 カエルじゃないよ、サンショウウオ。

木島 知らない。

前田 世界最大の両生類。

木島 カエルじゃん。

前田 カエルじゃない。

木島 どこに？

前田 あその隣の水族館。サンショウウオフェアやってるんだって。

木島 北海道じゃないんだから。

前田 え。

木島 いや。そっちに行くのは遠いな。

前田 そうだね。

木島 ……水族館ってさ、

前田 うん。

木島 なんか、寂しいよね。

前田 は？

木島 水族館は寂しい。

前田 何が。

木島 魚と距離があって。

前田 意味わかんない。

木島 魚と、ようやく対面できるのに、ガラス一枚で対面している方が、なんか魚のことがわからない気がする。

前田 あんな。

木島 うん。

前田 水族館のガラスは水圧の関係で物凄く厚いぞ。

木島 え。

前田 ガラス一枚っていうのは、なんか水族館のガラスに失礼だぞ。

木島 ……前田はさ、水族館とか行ってあの魚美味しそう。とか思うタイプでしょ。

前田 何タイプだよ。

木島 そういうところ好きよ。

前田 全然嬉しくない。

木島 (笑う)。

暗転

「木島は、この3年半後、永逝する。」

第5場

でっかいビルとかに丸ごと入っているでかい予備校の廊下。鈴木がベンチにうつむいて座っている。そばに上地が立っている。缶コーヒーを二つ持っている。

上地 ああ。

鈴木 ……。

上地 これ。

上地が鈴木に缶コーヒーのうちの一つをなるべくラベルが見えるように差し出す。

鈴木 あ、え、……もらっていいんですか？

上地 じゃなくて、

鈴木 え？

上地 これ、あなたのなんです。

鈴木 あ。……あー！

上地 さっき自動販売機で私が買おうとしたらなんか入ってて、そういえば私の前に買った人、お金払ってどっか行っちゃったなりって、思ってた。

鈴木 あ、すいません、ほんと。うわ、なんでだろう。

上地 いや、別にいいんですけど、

鈴木 うわー、飲まれてなくて良かったー。

上地 え。

鈴木 ん。

上地 ……それは、私が自動販売機に残ってる飲み物を飲むような人に見えるってことですか？

鈴木 は？

上地 だから、私が、自動販売機に残ってる未開封だけど、誰のかわからないような飲み物を勝手に飲むような常識はずれのがさつ女に見えるってことですか。

鈴木 いや、べつにあなたのことをいってるわけじゃなくて。

上地 成績悪いんですね。

鈴木 は？

上地 成績悪くて落ち込んでるんですね。

鈴木 何言ってるの？

上地 予備校の廊下で模試の成績返却されたあとに首傾けて真下向いてて、おまけにコーヒーマシーンで買ったのに持って帰るの忘れてるような人は、成績悪いに決まってるじゃないですか。

鈴木 いや、まあ、そうだけど。そうだけど、なんか、なんですか、あんた、悪いですか？

上地 悪くないです。

鈴木 え。

上地 悪かったのは私の成績です。

鈴木 そう。

上地 成績悪くて、座りたいです。

鈴木 どうぞ。

鈴木、隣が空いていることを示す。

上地 ……なんか私より落ち込んでる人見て、ちょっと落ち着きました。

鈴木 え。

上地 あなたです。

鈴木 ……どうも。

上地 ありがとうございます。

鈴木 ……飲まないの。

上地 え。

鈴木 それ。

上地 ……猫舌だから。

鈴木 こっちの冷めてるし交換する？

上地 いやです。

鈴木 ……そう。

間

鈴木 上地さんはさ、
上地 え？

鈴木 大学、どこ目指してるの。

上地 いや、待って。

鈴木 ん。

上地 なんで、私の名前知ってるの？

鈴木 え、まあ、クラス一緒だし？

上地 え。

鈴木 え。

上地 あ、そうなんだ。

鈴木 あ、え。

上地 いや、ごめん、あんまり気にしてなくて。

鈴木 ……そう。

上地 つていうか、ごめんじゃないか。

鈴木 え。

上地 え、いやだって普通覚えてないでしょ。あんだけ人数いるなかの席もたいして近くない人の名前つて。

鈴木 あ。

上地 近くないよね？

鈴木 近くない。

上地 なんで？

鈴木 え？

上地 だから、なんで私の名前知ってたのよ。

鈴木 別に……ま、そういうこともあるでしょ。

上地 ないよ。

鈴木 ないか。

上地 うん。

鈴木 ……。

上地 まあ、いいんだけど。

鈴木 志望校、一緒なんだよ。

上地 え。

鈴木 なんか、面談みたいなやつで、この大学志望してますって言ったら、上地さんも一緒だって言われて、なんとなく知ってたっていうそれだけの話。

上地 へー。

鈴木 うん。

第6場

上地　じゃあ、二人とも受からないかもね。

鈴木　ありえるね。

上地　成績悪いからね。

鈴木　そうだね。

上地　浪人だしね。

鈴木　そうだね。

上地　浪人ってなんだろう。

鈴木　なんだろうってなに。

上地　流浪の人だよ。

鈴木　ああ。

上地　旅人。

鈴木　旅人？

上地　あてもなくさまよう。

鈴木　……浪人ってね、

上地　うん

鈴木　漢字がさ二つあるのよ。

上地　え。

鈴木　シ(サンズイ)の流浪の浪人と牢屋の牢に人で牢人。

上地　へー。

鈴木　俺はそっちだな、牢屋の牢。囚われの牢人。

上地　なんでそんなこと知ってるの？

鈴木　牢人決まった時に調べたんだよ。

上地　真面目だね。

鈴木　真面目か？

上地　真面目なのに成績悪いんだね。

鈴木　う。

上地　真面目なのに浪人だ。

鈴木　真面目じゃどうにもならないことあるのよ。

上地　勉強とかね。

鈴木　とかね。

夜。深い深い山の中。鈴木が自分で掘った穴の中にいる。神保はそれを座って見ている。

神保 とかね、じゃねえよ。黙って勉強しろよ。

鈴木 マジでそうなんですけど。

神保 結局受かったんでしょ。

鈴木 無事二人とも合格で。

神保 スキスキパワーじゃん。

鈴木 別に好きじゃねえし。

神保 どうせ教室でちらちら見てたんでしょ。なんかいいなって。勉強しろよ。

鈴木 いや、見てましたけど、別にあれですよ、超チラチラですよ。

神保 余計だめだよ。きもいよ。

鈴木 いや、まじで、全然なんていうんですか、もうほとんど見てないくらいの感じ
です。

神保 バレてないって思ってるでしょ。

鈴木 はい。

神保 バレてるからね。そういうなんか、キモさがあるね鈴木くん。

鈴木 きも、いですかね、僕。

神保 いや、なんだろう、まあ、いいんじゃない、個性だよ。

鈴木 それ、どうなんだろう、その個性っていうのは。

神保 まあ、迷惑かかってない個性っていうか、なんだろう。いや、キモいはいすぎ
たかな。うん。ごめんね。

鈴木 え、いや、謝っちゃうと逆にでしょ。

神保 あれ、それで、なんだっけ。

鈴木 え。

神保 その、あれだ、大学だ。

鈴木 ああ。

神保 大学、入ったら前田居たんでしょ。

鈴木 はい。

神保 知らなかったの？

鈴木 はい。

神保 メダカの水槽洗いながら進学先聞かなかったの？

鈴木 聞かないでしょ、仲良いわけじゃないし。緊張するし。

神保 緊張？

鈴木 緊張。なんか、独特な雰囲気があったんすよ、高校の時から。刺青入ってたし。

神保 そうね。

鈴木 ピータンみたいな。

神保 は？

鈴木 ピータンってなんかカッコいいじゃないですか、中華で、黒くて。

神保 わからん。

鈴木 俺らは、っていうか俺は、まあじゃがいもみたいな感じで。どうにか、こ
う、じゃがいもから脱却したかったんですよ。でも、前田はなんだろう最初から、
高校の時からピータンでなんか緊張しちゃって。

神保 鈴木君はイタリアンより中華派なんだね。

鈴木 ……ちゃんと聞いてます？

神保 だって意味わかんないもん。

鈴木 言っておきますけど、僕ピータン食べたことないですからね。

神保 は？

鈴木 とにかく黒くて、中がどんな風になってるかもわからなくて、どんな味がす
るのかもわからないピータン。でもなんかカッコいいピータン。

神保 ピータン。

鈴木 ピータン。

神保 ピーターパン。

鈴木 ピ、パン？

神保 ピータンになりたかったんだ鈴木君は。

鈴木 う、まあ、そうですね、大学入ったらピータンみたいにかっこよく？垢抜け
た？いい感じになれると思ってたんですけど。

神保 うん。

鈴木 大学行ったら前田がいて。

神保 ピータン。

鈴木 そう、ピータン前田。

神保 かっこいいか？なんか目つきとか悪いし。

鈴木 いや、見た目じゃなくて、なんだろう、なんかそういう、雰囲気ですよ、雰
囲気。

神保 そう。

鈴木
で。

神保
で？

鈴木
で、そのあかりが、前田と付き合ってて

神保
あかり？

鈴木
さっき話したでしょ。

神保
え。ああ、塾のね。

鈴木
そう。

神保
名前で呼んでんの？

鈴木
え。

神保
キモいなー。なんか、うわー、キモいな。

鈴木
何が。

神保
人の彼女名前で呼び捨てってなんかキモい。

鈴木
いや、それはだって俺の方が先に知り合ってたわけだし。

神保
それはキモいよ鈴木くん。

鈴木
え、なんすか。

神保
俺のキモいのボーダーを軽く超えてきてるよ、人の彼女名前呼びは。

鈴木
まじですか。

神保
うん。

鈴木
え、キモいですか。

神保
うん。

鈴木
いや、キモくないですよ。

神保
キモいよ。

鈴木
……。

神保
鈴木くん、キモいよ。

鈴木
……。

神保、足元に石が落ちてるのを見つける。

神保
あ。綺麗な石。

鈴木
……。

神保
すごいよ、ツルってしてる。

鈴木
……石って、大体そうでしょ。

神保
オタマジャクシみたい。

鈴木 大体石ってそうでしょ。

神保 太ったネズミみたい。

鈴木 ……まあ、いいんですけど。

神保 卵の化石みたい。

鈴木 ……前田、大学辞めたじゃないですか。

神保 うん？

鈴木 前田、急に大学やめたじゃないですか。

神保 あ、そうだった。

鈴木 神保さんですね。

神保 ……。

鈴木 神保さんのせいで、やめたんですね。

神保 ……。

第7場

うるさい居酒屋。上地と鈴木が座っている。机にはジョッキが二つとおつまみ数点。

上地 なんか、大学生みたい。

鈴木 何が？

上地 居酒屋でたこわさと軟骨の唐揚げって。

鈴木 テキトーに頼めって言ったでしょ。

上地 そうだけどさ。

鈴木 それ言うならこんな店にするなよ。

上地 なんて。安いでしょ。

鈴木 その発想がすでに大人じゃないんだよな。

上地 大人でしょ、もう随分。

鈴木 ……で？

上地 え？

鈴木 え。

上地 なに？

鈴木 は？

上地 何よ。

鈴木 いや、お前がなんか急に誘ったんでしょ。

上地 ああ。

鈴木 ああ、って。

上地 まあ、そう。

鈴木 何？

上地 待って、なんでそんな聞き出そうとするの？

鈴木 は？

上地 もっと、なんか久しぶりに会ったんだからさ、盛り上げてよ。

鈴木 え、なに、俺？

上地 俺でしょ。

鈴木 え、あ、いや、別に話すこと、

上地 ないの。信じられない。

鈴木 じゃなくて！

上地 ん？

鈴木 久しぶり。

上地 ……久しぶり。

鈴木 ……元気だった。

上地 うん。

鈴木 そう。

上地 ……おわり？

鈴木 ……焼そばパンって関西人が考えたんだよ。

上地 え、そうなの。

鈴木 炭水化物に炭水化物じゃん。

上地 あ、たしかにね。

鈴木 高校の時、売店にめっちゃ人気の焼きそばパンがあって、それがさ、いつつ
も売り切れてんのよ。それで、どうしても食べたくなくて、昼休憩前の授業サボっ
て売店開くの待ってたの。

上地 うん。

鈴木 でさ、時間になってパンのコーナーまでいったらさ、売ってなかったんだよ
焼きそばパン。そんなことある!?だって、焼きそばパンっていうコーナーはあるの

にさ、焼きそばパン置いてないって、それで、焼きそばパン目当てに来た奴らに他の物買わせるんだよ。あこぎな商売だよあれは。

上地 え、なんの話？

鈴木 だから、うちの高校の都市伝説っていうか七不思議。

上地 え、何それ。

鈴木 ……大学の裏にさ、でっかい山あるじゃん。

上地 何急に。

鈴木 その山の麓にポツンと公衆電話があって、

上地 うん。

鈴木 そのボックスに書いてある番号に電話したら女の人がでて、なんでも願いを叶えてくれるんだって。

上地 え、なに？

鈴木 魔法の電話ボックスの話。

上地 今？

鈴木 ……前田。

上地 え。

鈴木 前田、たまに会ってるよ。

上地 あ、そうなんだ。

鈴木 うん。

上地 大丈夫そう？

鈴木 え、何それ。

上地 いや……。

鈴木 一緒に住んでるんじゃないの？

上地 いや、そうなんだけど。

沈黙。うるさい居酒屋の音。

鈴木 前田の腰のところにさ。

上地 うん。

鈴木 タトゥーあるじゃん。黒い羽の。

上地 あ。知ってるんだ。

鈴木 高校の時に一回見せてもらったことあって。

上地 へー……。

鈴木 仲良い中学の人とお揃いにしたって言ってた。

上地 え、お揃い？

鈴木 あれ、違うっけ。

上地 うん、聞いたことないけど。

鈴木 じゃあ、違うか。

上地 ……。

鈴木 その時に好きな魚の話になつてさ。

上地 うん。

鈴木 あいつはサンショウウオって言ってた。

上地 魚じゃないじゃん。

鈴木 かつこいいよね、サンショウウオ、両生類だし。

上地 ……鈴木くんは？

鈴木 俺はね、メダカ。

上地 かわいいじゃん。

間

上地 どれくらい会ってるの？

鈴木 月に、一回くらい。

上地 どこで？

鈴木 あいつが働いてるバーみたいな所。

上地 そう。

鈴木 行ったことは？

上地 ない。

鈴木 ……そう。

上地 なんで、大学辞めたか知ってる？

鈴木 え、知らないの？

上地 うん。

鈴木 いや、俺も知らない。

上地 え、そうなの。

鈴木 だって、なんかあの頃は訊きづらかったし、これだけ時間経ったらもうね、別にいいんじゃないの？

上地 それは、そうなんだけど。

鈴木 うん。

上地 ……願い、叶わないよ。

鈴木 え。

上地 さっきの、電話ボックスの話。大学の時間いたことあるもん。願いが叶うん
じゃなくて、悩みがなくなるってやつ。

鈴木 え、じゃあ、ただの電話悩み相談室じゃん。

上地 そう。

鈴木 ……聞き上手なんだね、その人。

上地 確かに。

第8場

昼。バーのような所。前田と神保がいる。前田は手巻きタバコのような
物を作っている。

神保 んで、結局中退したんだ。

前田 まあ、はい。

神保 あーあ。大学くらい卒業したらよかったのに。

前田 いや、神保さんに言われたくないですよ、まじで。

神保 まあ、そうだけどさ。結局その彼女と住んでるんでしょ、今でも。

前田 まあ、はい。

神保 なにも言われないの？

前田 そうなんですよ。なんにも言われないんですよ。

神保 凄いな、彼女さん。

前田 そうですか？

神保 うん。俺なら耐えられないよ。

前田 そうですかね。一応働いてますし。

神保 俺は助かるけどね、前田君いてくれると。

前田 いえいえ。

神保 真面目だし。

前田 意外とね。

神保 意外じゃないけど。

前田　そうですか。
神保　うん。

間

神保　前田くんさ。

前田　はい。

神保　聞いちゃってもいい。

前田　何をですか。

神保　なんで大学辞めたか。

前田　いや、まあ、やる気無くなっちゃったんで。

神保　まだ聞いてないんだけど。

前田　え。

神保　今のは、こういうこと聞いていい？っていう確認だったのに、先に答えちゃうから。

前田　……。

神保　早とちりだぞ。

前田　うぜえー。

神保　で、聞いていいの？

前田　何を？

神保　なんでやる気無くなったか。

前田　まあ、別にいいんですけど。

神保　うん。

前田　……ここにタトウーあるじゃないですか。

神保　ああ、そのダサタトウーね。

前田　いや、まあ、俺は気に入ってますけど。

神保　で？

前田　これ一緒にいれに行った奴が、中学の同級生なんですけど、なんか、大学の途中で、急に死んじゃって。そいつの通ってた大学の校舎から飛び降りたって。

神保　……へー。

前田　急に連絡きて、電車乗って、葬式行って。あいつの葬式、知ってる人から知らない人まで、いっぱい人が来てました。……そう、遺体が、無くて。なんか、損傷激しかったみたいで、最後に顔見れませんでした。電話でした最後。

神保 ……。

前田 なんてかなって考えてたこともあるんですけど、考えたって分からないじゃないですか。分からないことは考えたくない、から考えないようにしよう。と思いつながら考えちゃってて。葬式の後、大学にいったら、なんか違って。そんなことこれまで感じたことなかったのに、みんなどうやって生きているんだろうって。……そんなこと考えなきゃいけなくなるなんて最悪で。もう多分一生。ふとした瞬間に頭をよぎるんです。自分で死ぬっていうのは、そういうことなんですよね。

神保 ……女の子？

前田 はい。

神保 可愛かったんだ。

前田 はい。

神保 ……素直だね。

前田 いや、まあ、終わったことなんで。

神保 割り切ってるね。

前田 ……。

神保 え、なんかやり残したことある？

前田 え？

神保 その子と。

前田 ……水族館。

神保 ん？

前田 水族館やっぱ行っておけばよかったなって。

神保 ……めっちゃ好きじゃん。

前田 ……。

神保 え、どこが好きだったの？

前田 凄いつすね。

神保 え？

前田 そんなズバズバ質問してきて

神保 え、なんか嫌な感じ？

前田 別にそういう訳じゃないですけど、普通、なんか嫌じゃないですか、こんな話聞かされるの。

神保 そうかな。

前田 そうですよ。

神保 ……普通だよ。

前田 え。

神保 普通。

前田 ……何がですか？

神保 そんなに特別じゃないよ、前田くん。

前田 そうですかね。

神保 井の中のあれだよ。

前田 ……。

神保 え、怒った。

前田 いや、え、ちょっとびっくりして。

神保 え、何が。

前田 だって、え、僕刺青入ってますよ。

神保 そうだね。

前田 しかも、中学生で。

神保 そうね。

前田 友達もできなかったし。

神保 あ、そうなんだ。

前田 おれ、普通ですか。

神保 うん、普通だと思うけどな。

前田 あら。

神保 俺、高卒だし。

前田 え。

神保 俺、高卒だし、前田くんも高卒だし。

前田 いや、そうですけど。

神保 なんか、前田くんって普通にみんな大学行ってるって思ってそう。

前田 思ってたんですよ。

神保 ほんと？

前田 うん。

神保 そうかな。

前田が席を立とうとする。手には作り終えた巻きタバコのような物。

神保 ここで吸わないでね。匂い付いちやうから。違法だから。

前田 っていうか、これあげますわ。

神保 え、いいの。

前田 はい、なんか、いい感じなんで。

神保 あ、そう、あざっす。

第9場

夜。深い深い山の中。神保、穴の中にいる。穴のそばで座り込んでいる鈴木。神保は例の巻きタバコのようなものをふかしている。

鈴木 ……よく吸えますね。

神保 何？

鈴木 それ、よく吸えますよね、今。

神保 ああ。

鈴木 意味わかんないっすわ。

神保 俺も意味はわかんないよ。

鈴木 ……。

神保 意味とかねえ、考えないの。意味ないから。違法だってわかってるよ。見つかったら捕まるって。でも、別にね、誰かに迷惑かけてるわけじゃないからね。

間

神保 俺さ、自分の人生、というか、今の生活わりと気に入ってるのよね。

鈴木 ……。

神保 客観的に見たら、まあ、あれだけど、生きてりゃいいことあるからね。家賃毎月ちゃんと払ってさ、そこそこ美味しいもの食えてたらいいよねって感じで。

鈴木 ……。

神保 うち実家焼肉屋じゃん。

鈴木 なんの話ですか。

神保 いや、なんか聞いてくれそうだったから。

鈴木 ……。

神保 喋りたい時あるでしょ。深夜だし。

鈴木 ……まあ、いいんですけど。

神保 昔から、家の手伝いしてて。一番きつかったのはネズミの駆除ね。

鈴木 ……。

神保 よくアニメとか絵本とかで、ネズミ出てくる時相当可愛く描かれるけど。俺からしたら、まあ俺からしなくても、ゴキブリとネズミってほとんど変わんなくて、むしろ哺乳類でかい方が殺してからめんどくさいしっていう。

鈴木 ……。

神保 ゴキブリとる粘着シートみたいなのあるじゃん。あれの少しでかいやつがあつて、そこに客の食べ残したミノとかを焼いて置いておくの。それでね、くつついちゃって動けなくなってるのを朝発見するわけ。見つけたら、まだ動いてるのをさ、こう、首のところ持ってグキツと。……あの感覚はやっぱりきもいね。だからさ、俺赤ちゃんとか抱っこできないんだよね。怖くて、あの皮の、皮膚の感じとかがさ。

鈴木 ……。

神保 それがすごい嫌だったから、なんか色々調べて新型ネズミ取り作ったのよ自分で。高卒だけど。

鈴木 へー。

神保 水槽に水を張って、ガラスには登ってこれないように油塗って、その上に細い棒をセットしておくの。その棒の先に電流流れる悪戯グッズの中身みたいな置いていて、そこに餌置いとくとき、ネズミがバチバチ電流浴びて水槽にポチョンって落ちてくの。

鈴木 ……。

神保 気づいたら溺れてて、回収、処分の繰り返し。

鈴木 ……。

神保 飲食業って大変だね。

神保、足元に石を見つける。

神保 あ、綺麗な石。2個目だ。

沈黙

鈴木 高校の時の、育ててた魚いたじゃないですか。

神保 いたね。

鈴木 死んだら一匹づつ、学校の裏手に埋めに行っていました。

神保 あ。

鈴木 え。

神保 じゃあ、初めてじゃないじゃん掘るの。

鈴木 まあ、そうですね。

神保 でも、あれだよ、本当は埋めたらダメなんだよ。

鈴木 え？

神保 多分、不法投棄だよ。

鈴木 ふ。

神保 魚とかネズミとか小さい死骸は家庭の燃えるゴミでださないと。

鈴木 え、そうなんですか？

神保 うん。じゃないと、埋めたところの生態系壊れちゃうから。

鈴木 生態系。

神保 でも、あれだよ、猫とか犬はだめだよ。ちゃんと電話して業者に取りに来てもらわないと。

鈴木 詳しい。

神保 ね。なんで詳しいんだろ。怖。

鈴木 怖い。

神保 ……だめだな。

鈴木 え。

神保 やめところ。

鈴木 なにがですか。

神保 埋めるの。

鈴木 え。

神保 埋めるのやめところ。

鈴木 なんで。

神保 なんか、違うわ。

鈴木 ……。

神保 あと、二人じゃそんなに深くまで掘れないし。

鈴木 それは、そうですね。

神保 戻そうか。

鈴木 え。

神保 うん。

鈴木 え、めんどくさ。

神保 うん、ごめん。

鈴木 いや、え、あれ、これ、なんで掘ったんですたっけ。

神保 わかんない。

第10場

山の麓の電話ボックス。中に受話器を持った上地が居る。一方、そこまで遠くはないどこかで、木島が電話の相手をしている。

上地 最初は、なんか大人っぽいなって思ったんです。

木島 うん。

上地 自分がこれまで普通に生きてきて、自分の何かがこの先変わるって思ってたんですけど。初めて彼を見た時に、あ、この人が変えてくれるんだって思いました。

木島 一目惚れじゃん。

上地 一目惚れ、なんですかね。

木島 知らない。

上地 大学に入って良かったって思って、一生一緒にいたいと思った訳じゃないんですけど、ただ、今一緒にいたいのが長く続いて。

木島 うん。

上地 最初は凄いいーハーで彼の好きな音楽聴いてみたり、服とかなんか合わせてみたり。全然苦じゃなかったんです、元々好きなものとかないんで。でも全然そっけなくて、それなのになんか付き合ってくれて。なんでなんだろう。彼は私のことを好きでいてくれるのだろうか。どうなんだろう。

木島 ……。

上地 ……一緒に住んで少し経った時に思ったんです。自分のこれまでの人生、普通に幸せな人生になった。それが私は嬉しかったんです。前と違うことは彼がいるということ。

木島 ……。

上地 聞いてます？

木島 あ、うん。

上地 なんか、思ってた感じじゃなくて。

木島 なにが？

上地 いや、その、あなたに電話したら悩みを解決してくれるっていう。

木島 知らないよ、そんなの。

上地 そうみたいですわね。

木島 うん。

上地 ……なんで、こんな山まで来たんだろ。

木島 それは、切羽詰まっていたんだろうね。

上地 わかってるなら真剣に聞いてくださいよ。

木島 そうだね。

上地 気軽に誰かに話できる歳じゃなくなっちゃったんで。

木島 寂しいね。

上地 うん。

木島 ……。

上地 ……多分、すごい一方的なんです。

木島 ……。

上地 すごい一方的に思ってるだけ。

木島 ……普通。

上地 え？

木島 普通だと思うよ、そんなの。

上地 ……。

木島 そういうもんだと思うよ。人が他の人の事考えている時って一方的だと思うよ。

上地 ……。

木島 今、私はあなたのことを考えて、思っただけで、あなたも少なからず私のことを思っただけでいるとして。その二つがどこかで交わるってことはないと思うよ。思うってことは常に一方的なんだよ。それを相手が受け取るか受け取らないかは別問題なんだよ。多分。

上地 ……私は受け取れてないだけかもしれないって言うこと？

木島 知らない。

上地 へ。

木島 そうかもしれないかもしれない。

上地 無責任。

木島 でしょ。

間

木島 もしさ。

上地 なに。

木島 もし、その人が死んじゃったらどうする？

上地 なにそれ？

木島 いや、なんとなく。

上地 えー……。

木島 じゃあ、わたしが死んでたらどうする？

上地 え？

木島 わたしが実は死んでたらどうする？

上地 ……超怖い。

木島 そりゃそうか。

上地 でも……案外そんなものかもね。

木島 ……変な人。

上地 そう？

木島 死ぬよ。人は。

上地 でも、なんか死んでいて欲しくないな。

木島 どうして？

上地 死んでいたら会えないでしょ。

木島 ……そうね。

上地 常識だよ。

木島 ……変な人。

第二場

夜。アパートの一室。部屋の隅に前田と上地がいる。

上地 カーテンさ、遮光だと暗いと思うの。

前田 ん？

上地 カーテン。

前田 が。

上地 暗くない、遮光だと。

前田 うん、そうかもね。

上地 買い換える？

前田 そうね。

沈黙

上地 ねえ。

前田 ……何。

上地 背中をやつさ。

前田 うん。

上地 好きな人とお揃いにしたんでしょ。

前田 え？

上地 鈴木くんに聞いた。

前田 ふ。

上地 え？

前田 鈴木が盛ってるよその話。

上地 そうなの。

前田 お揃いじゃないよ。

上地 ……そう。

問

上地 サンショウウオ好きなの？

前田 ああ、……そうね。

上地 初めて聞いた。

前田 かつこいいでしょ。

上地 そうかな。

前田 ……水族館行こうか。

上地 え。

前田 ……やっぱいいや。

上地 何それ。

前田 別に。

上地 ……そう。

間

上地 イルカショーってさ、イルカがお腹打ちつけてて、痛そうだね。

前田 なにそれ。

上地 高い所に釣ってあるボールに向かって飛ぶわけでしょ。私でいうと、市民プールにたまに付いてる訳わかんない飛び込み台から飛び降りるようなもんじゃん。

前田 うん。

上地 ただでさえさ、普通に用意ドンで飛び込むのもさ、お腹打ってバチーンってなるのにさ、あんな高いところから落ちたらとんでもなく痛いと思うんだよね。

前田 そうね。

上地 しかも、イルカなんて体のほとんどがお腹なわけじゃない。胴長だから。私は腕も足も隙間あるからダメージ受ける面すくないけどさ、

前田 でも、それは飛び込み下手くそだからじゃない？

上地 ……私が？

前田 そう。

上地 そうかな。

前田 だって俺お腹痛くなったことないよ。

上地 嘘。

前田 本当だよ。

上地 え、すごいね。

前田 そうかな。

上地 才能だよ。

前田 なんの才能？

上地 上手に飛び込める才能。

前田 みんなできるよ。

上地 私できないよ。

前田 練習したら？

上地 飛び込み？

前田 飛び込み。上手になりたいんでしょ？

上地 は、そんな話してないよ。

前田 え？なんの話？

上地 だから、え、なんだっけ。

前田 わかんない。

間

前田 イルカはさ、上手じゃん。

上地 なにが？

前田 泳ぐのが。

上地 そりゃそうでしょ。イルカなんだから。

前田 だから全然痛くないと思うよ。むしろ気持ちいいんじゃないかな。ずーっ、しゅっ、ボールパチン、拍手わー、お姉さん褒める、うえいうえいやってやったぜ、一瞬加速度がプラマイゼロになって、次は入水。ヒュー、しゅるん、すっ、水！！やったぜ！！最高だぜ！！エサ、褒美の餌をよこせ！！って感じ。

上地 なんか楽しそう。

前田 プロだからね、人を楽しませる。プロフェッショナルだよ。

上地 頭あがないな。

前田 多分、俺よりかしこいしね。

上地 ……プール行こうよ。

前田 え。

上地 プール、飛び込み教えてよ。

前田 え、やだよ。

上地 なんで？

前田 俺泳げないもん。

上地 え、え！

前田 あれ、言ってなかったけ。

上地 え、聞いてない、し、え。

前田 うん。

上地 だって、飛び込みうまいんじゃないの？

前田 うまいよー、音立てないよ。でも、その後泳げないのよ。進んでこうとクロールするんだけど、もう全然。足あがないし。っていうか着いちやうし足、床に。…そのせいか。足がさ、着くからいつまで経っても泳ぎが上達しないのよ。だって歩けちゃうもん。

上地 泳ぎなさいよ。

前田 昔、川で溺れたことあって。

上地 そうなの？

前田 泳げないからさ、歩きながら顔つけて、魚をね探してたの。

上地 うん。

前田 そしたらさ、ちょうど岩と岩の間に顔が挟まってさ、抜けなくなっちゃって。

上地 え。

前田 結局、なんか助かったからよかったけど。

上地 足ついても溺れてるじゃん。

前田 そうだね。……イルカはすごいね。水中戦も空中戦もガンガンいけるもんね。

俺なんか地上だけだよ、歩けても水中じゃおぼれるもん。俺の専門は、地上と飛び込み。

上地 じゃあ、プールだめじゃん。

前田 泳がなくてもいいならいいけどね。

上地 ていうか、刺青入ってる人プール大丈夫なのかな。

前田 知らない。行かないから。泳げないから。

上地 まあ、そうね。

間

上地 じゃあ、海行こうよ。

前田 ……海ね。

上地 足つかないよ海は。

前田 本格的に溺れちゃうけどね。

上地 私は泳げるから。

前田 飛び込み出来ないの？

上地 海で飛び込みなんかいらないの。

前田 それは、そうね。

上地 行かないの？

前田 ……魚見れるかな？

上地 うーん、結構泳がないと無理かな。

前田 サンショウウオいるかな。

上地 バカじゃないの。

前田 いたら、捕まえようよ。ペットにしよ。でっかい水槽買ってきてさ、一緒に泳ご。

上地 バカ。

第12場

公園。大きな池があつて、その前に前田が座っている。そばのベンチに鈴木が座っている。

鈴木 で、海行くんだ。

前田 うん。

鈴木 まあそれはいいんだけどさ。

前田 うん。

鈴木 あれ？なんかうまくいってないって話じゃなかったっけ？

前田 え。誰が。

鈴木 あなたたちが。

前田 ん。

鈴木 まあ、いいんだけど。

前田 それでさ、引越そうかなって思つて。

鈴木 え。

前田 なんか、うーん、なんだろう、よくないなあつて思つてさ。

鈴木 何が。

前田 いや、なんとなくずっとここにいるのもなつていう。

鈴木 そう。

前田 それで、ちょっと内見しに行くの、海に。

鈴木 え。

前田 え。

鈴木 え、海行くっていうのはさ、ちょっとそこまでドライブに行こうみたいな話じゃなくて、海の近くに住もう的なことなの。

前田 うん。

鈴木 え、すごいね、え、なん、え全然わかんない。

前田 うん、急に決めたから。

鈴木 え、あかりは何て。

前田 え、言っていない。

鈴木 え。

前田 うん。

鈴木 もう、全然意味わかんない。

前田 だって、別れようと思ってて。

鈴木 お。

前田 お？

鈴木 お、お、おだよ！

前田 「お」ってなんだよ。

鈴木 おだろ。そんなの、なんだよ、仲良さそうっていう描写じゃないの？

前田 それはさ、あれだよ。最後の唐揚げだよ。

鈴木 え。

前田 昔さ、よく唐揚げ食べたでしょ、軟骨の。

鈴木 うん。

前田 軟骨のからあげってさ、普通の唐揚げに比べていっぱいあるじゃん。

鈴木 量が？

前田 そう。だから、割と最初は気にせずみんな箸を進めていくわけ、でも、なんか

途中からあれ、このペースで食べてると、あれ、意外となくなっちゃうぞ。みたいな。

鈴木 あるね。

前田 だから、最後に残るのよ。

鈴木 何が。

前田 唐揚げが。

鈴木 ん？

前田 残ってるでしょいつも、最後まで。なんか冷めちゃったし、脂っこいし、今

更食べる気にはならんなあみたいない感じで、ぽつんと軟骨残ってる時あるでしょ。

鈴木 だからなんだよ。

前田 だからそういうことなんだよ。

鈴木 は？

前田 俺は決めたのよ。この残った軟骨の唐揚げについて俺は手を付ける決心をしたのよ。そうなるとき、もうあと少ししかない唐揚げを味わおうとか、うわあと少しで食べ終わっちゃうなと思うでしょ。

鈴木 思うかもね。

前田　　そういうことなのよ。

鈴木　……その決心？は変わらないの。

前田　うん、もう決めたから。

鈴木　急だな。

前田　この前ね、店長に言われたのよ。前田くん意外と普通だよって。なんか嬉しくて。

鈴木　……。

前田　それからその辺ぶらぶらチャリンコ漕いでたらさ、いろんな人がいるなっと思ってたわけ。

鈴木　……。

前田　それでさ、俺も普通に歩いていいんだって思ったのよ。まあ、チャリンコ乗ってたから歩いてはないんだけど。

鈴木　……。

前田　そうなると引越でしょ。海でしょ。

鈴木　……。

前田　海沿いを朝チャリンコで走るわけ、そこにはこれまで俺が出会ったことのない人がいっぱいいてさ、見慣れてない風景があつてさ、そしたらまた、なんか上手くいく気がするんだよね。

鈴木　そうかな。

前田　きつとそう。

鈴木　どこに行っても一緒だよ。

前田　……。

鈴木　どこに行つたつて変わらないよ。前田は前田なんだから。ここにいたつて海にいたつて山にいたつて、前田は前田なんだからどうにもならないよ。

前田　……お前さ。

鈴木　何。

前田　そんなネガティブだつて。

鈴木　え。

前田　俺はずつとポジティブだと思って生きてきてたのよ。

鈴木　俺が？

前田　俺が。

鈴木　あ、お前？

前田　そう、だから、なんていうのポジティブな判断だと思つてたのよ、大学辞め

て、バイトして。

鈴木 いいじゃん。

前田 いいんだけどね、いいんだけど。店長みたいにはなれないと思って、あの人はさ、すごい幸せそうなの。ずっと。でも、別に俺は今、幸せじゃないなって思って。幸せになるためのポジティブ発想で一旦止まってると思ってたんだけど、あの頃はその先がないと思って止まったけど、今はさ、今は普通にいいこうと思っただのよ。普通にいいこうと思ったら結構先が見えてきて、そう考えたら一旦止まった俺のポジティブも捨てたもんじゃなくなって思ったね。

鈴木 なんの話？

前田 だから、海辺に引っ越してさ、カフェで働こうと思って。

鈴木 カフェ？

前田 カフェ。海辺でカフェしてる人なんか絶対幸せだろ。

鈴木 海辺でカフェするのは海辺でカフェするのしんどさがあるんだよ。お前にはわかんないよ。

前田 わかんなくていいよ。

鈴木 え。

前田 わかんなくて幸せならわかんなくていい。

鈴木 あ、そう。

暗転

第13場

曇っている夜。バスの車内。前田と木島が一番後ろから一つ前の席に座っている。隣同士ではなく、通路を挟んで片方に一人、他方に一人。

前田 最近気づいたんだけどさ、

木島 ……。

前田 電車の中でさ。

木島 ……。

前田 まあ、バスでもいいんだけど。

木島 ……。

前田 通話禁止ってあるじゃん。

木島 ……。

前田 あれってさ、まあ色々理由あるんだろうけど、何が嫌かって、会話の一方しか聞かされないことが一番嫌だと思っただよな。

木島 ……。

前田 なんか、一方的に聞きたくもない会話の片方だけ、応答でいえばオウだけを延々聞かされて。もっと言うと盛り上がってる会話の方が、相手の答えありきなわけ。すげー腹立つよね。

木島 ……。

前田 ねえ。

木島 ……。

前田 木島さん。

木島 ……。

前田 かなさん。

木島 ……。

前田 オウだけが一方通行なんですけど、木島かなさん。

木島 ……無視。

前田 無視すんなよ。

木島 なに。

前田 なにじゃねえよ。

木島 なんですか。

前田 ですかじゃねえって。

木島 うるさいんですけど、迷惑なんですけど。

前田 ……。

木島 黙んなよ。

前田 なんだよどっちだよ。

木島 ひそひそ声で。

前田 え。

木島 ひそひそ声で喋って。

前田 (ひそひそ声) なんですか？

木島 そのまま、ちよっと怒ってる感じにしてよ。

前田 (ひそひそ声のまま) お前、だから、なんなんだよまじで。

木島 そういうことよ。

前田 (ひそひそ声) 何が！！

木島 その声を落とそうという努力が足りてないのよ。

前田 誰が。

木島 そのさっき言ってた、電車で通話しちゃう人。

前田 ……。

木島 電話かかってきて、どうしようもない時あるじゃん。ていうか、電話かけるくらい意外とセツパ詰まってるのかなみたいな時、そういうときにさぐっと声を落とすって、周りに気を遣っている事が周りがわかる事が一番大事だと思うんだよ。

前田 は？

木島 その人が周りに気を遣えているかどうかとか、実際どう思ってるかどうかはあんまり関係ないわけ。ただ、気を遣われた相手がこの人が気を遣ってくれているとわかる事が大事なのよ。何が言いたいかわかる？

前田 わからん。

木島 気を遣えってこと。

前田 お前に？

木島 そう。

前田 えー。

木島 無視してる人に話しかけ続けるのはどうかと思うわ。

前田 逆だろ。

木島 え。

前田 お前が俺に気を遣えよ。

木島 絶対やだ。

前田 絶対ってなんだよ。

木島 絶対。

前田 普通にいやぐらいでいいだろ。

木島 私は気を遣わない。

前田 は。

木島 気を遣わない人間。

前田 そうですか。

木島 あんたは、気を遣えない人間。

前田 はあ！

木島 気を遣える人はストローでシュゴシュゴしません。

前田 お前、それいつの話だよ。

木島 高校生。

前田 だろ。

木島 高校生にもなってシュゴシュゴしてるやつは大人になってもシュゴシュゴする。

前田 してねえし。

木島 シュゴシュゴするなよ、大人なんだから。

前田 シュゴシュゴしてねえって。

木島 店内だからでしょ。

前田 ……。

木島 店内だからシュゴシュゴしてないだけでしょ。テイクアウトしたらシュゴシュゴしてるでしょ。

前田 ……。

木島 一人の時はしてるでしょ。

前田 してるけど。何よ。

木島 ほらしてるじゃん。

前田 してもいいだろ！一人なんだから。一人の時くらいシュゴシュゴさせてくれよ。シュゴシュゴ気持ちいいんだよ。なんか、わかんないけど。癖なの。癖なんです。

木島 でしょうね。

前田 なんなんだよ、久しぶりなのに。

木島 そうね、久しいね。

前田 ぶりだろ。

第14場

夜。人気のない道を走る車の車内。運転席には神保、後部座席に鈴木が座っている。

鈴木 ……なんなんですか？

神保 何が？

鈴木 いや、全然説明なくて。

神保 うん。

鈴木 急に神保さんから電話あって、っていうか前田かと思って出たら神保さんで、何かと思ったら、前田死んだって言われて、で、な、え、俺ちょっと今あんまりわかってないっていうか。

神保 川あるでしょ。

鈴木 え？

神保 川。

鈴木 ……はい。

神保 あそこ、あいつの帰り道なわけ。それで、あいつ自転車です普通に帰ってて。俺もたまたま用事あったからさ、ちょっと経ってから車でその川沿い？の道走ってたのよ。そしたら、なんか自転車がさ川の方に、ほら川と道の間にさ坂あるじゃん。川の方に下ってる坂。そこに自転車がさ、転がってて。夜だからあんまり良く見えなかったけど、うわーなんだろ、じじいでも転んだのか。あぶねえなーとか思ってた、良く見てみたらさ、すげえ見たことある自転車。ビビって、なんかやべえなってると思って見に行ったら、そしたら、前田がさ川に頭突っ込んで、とりあえず、荷台に自転車と前田乗つけてさ、まあ、鈴木くん電話したって感じだよ。

鈴木 え、いや、だから、それは、まあ、わかったっていうか、おれはなんで、その、え？だから、警察とか、

神保 ばかちん！

鈴木 え。

神保 警察なんてそんな怖い言葉つかわないの。

鈴木 いや、だって、

神保 警察行ったら色々まずいでしょ。俺もまずいし、前田もまずいでしょ。まずいよね？

鈴木 つすね、確かに。

神保 こういうのたまにあるから大丈夫だよ。

鈴木 え？

神保 大丈夫だよ。

鈴木 ……っていうか、なんで俺なんですか。

神保 え。

鈴木 俺全然関係ないじゃないですか。神保さんのこともほとんど知らないし。

神保 人手が欲しいのよ。

鈴木 え。

神保 一人はやっぱりしんどいでしょ。鈴木くんちょうど近くにいそうだったし暇そうだったし、前田の友達って鈴木くんしか知らないんだよね。

鈴木 俺じゃなくてもいいじゃないですか。

神保 そうだけどさ、なんか、やっぱり前田のこと知ってるひとじゃないとき。

鈴木 いや、まあ、いいんですけど、とはならないんですけど、

神保 でさ、とりあえず、あいつの家行きたくて。

鈴木 え。

神保 そう。色々ね持つてると思うし。

鈴木 いや、家は、だって。

神保 彼女さんにも迷惑かかったらお互い嫌じゃん。

鈴木 ……はい。

間

鈴木 殺したんですか？

神保 は？

鈴木 俺も殺されるんですか？

神保 ……そんな怖いこと言わないでよ。

鈴木 ……。

神保 鈴木くんは普通だね。

鈴木 ……。

神保 普通の反応だと思うよ。

鈴木 ……。

神保 でも今は黙っとこうね。普通もいっぱいあるから。今、普通だから。

鈴木 ……。

神保 息止めて、頑張つて。

鈴木 ……わかんないです。

神保 うん。

第15場

海辺。木島と前田がいる。

前田 葬式、いっぱい人来てたぞ。

沈黙

木島 ……朝起きてさ、

前田 え。

木島 最初に何する？

前田 あー、日による。

木島 ……あ、そう。

間

木島 前田はさ、

前田 うん。

木島 同じタトゥーをいれたかった？

前田 え。

木島 私は絶対嫌だった。

前田 ひど。

木島 そうかな。

前田 別に俺も一緒のとか考えてなかったし。

木島 そう。

前田 うん。本当はさ、この両肩にさ、和柄のやつ入れようと思ってたのに、お前に止められてさ。

木島 当たり前でしょ。ばかじゃないの。

前田 そうかな。結構イカしてると思うけどな。

木島 あの頃が一番楽しいって思っちゃってさ。

前田 うん。

木島 この先に例えばあったとしてもさ、私にはそういったものを取り返しに行く気力も気概もなかった。

沈黙。波の音が聞こえる。

前田 俺はさ、お前に謝って欲しかったのかもしれない。

木島 ……いやだ。

前田 うん。

第16場

夜。アパートの一室。鈴木と上地がいる。

上地 さっきの人は？

鈴木 あ、前田の職場の人。

上地 ああ。

鈴木 いや、前田にさ言われて、忘れ物取ってきてほしいって。

上地 そう。

鈴木 うん。

沈黙

上地 昨日、カーテン買い変えてさ。

鈴木 うん。

上地 まだ、見てもらってないんだよね。

鈴木 前田に？

上地 そう。遮光のカーテンやめたの、暗いかなって思ってた。

鈴木 いいじゃん。

上地 ……なんかね、最近近くなったと思う。

鈴木 ん？

上地 距離がね。なんか、ベッドに寝てると背中がおつきく見えて、遠近法だね。心の遠近法、近いから大きく見える。

鈴木 ……。

上地 近いとなんか、これまで見えていたものが、透けて、見えるような。

鈴木 ……。

上地 もう、帰ってこないの。

鈴木 ……そうかもしれない。

上地 そう。

問

上地 この前電話しに行ったよ。

鈴木 え。

上地 あの、この前言ってたさ、山の麓の公衆電話の。

鈴木 あ、噂の。

上地 噂の女の人。

鈴木 あ、そうなんだ。

上地 うん。

鈴木 え、出たの。

上地 うん。

鈴木 え、出たの！

上地 うん。

鈴木 ガチじゃん。

上地 仲良くなった。

鈴木 え。

上地 うん。

鈴木 仲良くなったの！その女の人と。

上地 うん。

鈴木 すごいじゃん。

上地 凄くないよ。

鈴木 どんな人。

上地 わかんない。

鈴木 え。

上地 見た事ないもん。

鈴木 わかってるよそんなこと。

上地 全然話聞いてくれないの。

鈴木 そうなんだ。

上地 でも美人。

鈴木 会った事ないんでしょ。

上地 うん。

鈴木 じゃあわかんないじゃん。

上地 でも、いい人。

鈴木 話聞いてくれないのに。

上地 いいの。話したいだけなんだから聞いてくなくても。

鈴木 そうかな、寂しいけどな。

上地 寂しいけどそういうもんでしょ。ちゃんと聞いてくれてるかどうか気になっ

たら、話もできなくなっちゃう。

鈴木 そう。

上地 振られちゃった。

鈴木 え。

上地 そっか、帰ってこないんだ。

鈴木 ……。

上地 いい感じだと思ってたんだけどな。

鈴木 ……。

上地 すっごい気持ちよく目が覚めるときあるじゃん。

鈴木 うん。

上地 そういう時にさ、勢いよくカーテン開けるの。もちろん、晴れだと思って、で

も雨。

鈴木 ……。

上地 そういう時にさ、カーテンなんか開けなきゃ良かったって思うの。カーテン
なんか開けずに家にいれば良かった。そしたら、一日気分良くいられたのに。

鈴木 うん。

上地 私と前田くんは、結局他人だからさ、結局何考えてるかはわかんないじゃん。でもさ、その、そこをさ結局予想して、予測して、見ないようにするっていうのが、なんか良かったんだろうな。まあ、私には無理だけど。

鈴木 ……。

上地 晴れてたらよかったな。

沈黙。街の音がする。

鈴木 もう行くわ。

上地 よろしくお伝えください。

鈴木 ……うん。

第二場

夜が明けようとしている。深い深い山の中。穴は無くなっている。その上に神保が立っている。そのそばに座っている鈴木。

神保 おわったー。

鈴木 おわりましたね。……なんだったんだろう。

神保 なにが。

鈴木 掘って、掘って、埋めて、埋めて。残ったのなんか石だけですよ。

神保 綺麗な石な。

鈴木 綺麗な石だけですよ。

神保 二つな。

鈴木 綺麗な石が二つ残っただけですよ、こんなけやって。

神保 まだまだこれからだよ。

鈴木 なにが。

神保 鈴木くんは目先の利益を欲しがりすぎだよ。

鈴木 目先？

神保 掘って掘って埋めて埋めて、明日は筋肉痛だよ。鈴木 だから。

神保 体動かして良かったね。

鈴木 あったまおかしい。

神保 この後どうするの？

鈴木 そっちこそどうするんですか。

神保 俺はね、元の場所に戻してこようかな。

鈴木 え。

神保 川には入れずにさ。そこで、警察よんじやお。

鈴木 え。

神保 俺、第一発見者になる。

鈴木 え。

神保 そして、葬式だ。

鈴木 え。

神保 前田の葬式。

鈴木 埋めようとしたのに？

神保 うん。感謝されちゃうなご両親に。

鈴木 バカなんじゃないですか。

神保 でもさ、なんか大丈夫だと思うんだよね。俺、多分捕まらないと思うし。死体なくて徳するの俺くらいだけど、死体なくて困る人いっぱいいると思うんだよね。

鈴木 ……。

神保 ちゃんと、ツラみないとき、何か言ってもしょうがない気がする。っていうか、言えないと思う。死んでも、対象がないとさ。

鈴木 神保さん。

神保 まあ、死んでるから本人には届かないけどね。

鈴木 な、

神保 その場で言うっていうのが大事なんだよな。

鈴木 どっちなんすか。

神保 (息を吸って)朝の山は気持ちいいね。

鈴木 ……。

神保 マイナスイオンがさ凄いのよ。

鈴木 前田、凄く冷たかったです。

神保 ……川に浸かってたからね。

鈴木 別人みたいでした。

神保 うん。

鈴木 だから、なんか自分にはまだ実感がありません。

神保、鈴木の背中を蹴り飛ばす。少し転がる鈴木。

鈴木 殺す気！

神保 鈴木くんは生きてるよ。

鈴木 ……。

神保 ラッキーラッキー。

鈴木 ラッキー！

神保 いいねえ。

鈴木 ラッキー！！

神保 生きてていい事あったらね！

鈴木 身も蓋もなーい！

神保 鈴木くんは長生きしそう。

鈴木 いえーい。

神保 この石もらってもいい？

鈴木 何に使うんですか。

神保 うん、どうしようかな。持って帰ってから考える。

鈴木 そうですか。

神保 車乗ってくでしょ。

鈴木 いや、僕はいいです。

神保 どうして？

鈴木 歩いて帰ります。

神保 まあ、山、気持ちいいし。

鈴木 はい。

神保 歩くの大変だと思うけど頑張つて。

鈴木 はい。

神保 さようなら。

鈴木 はい。

第18場

山の麓の電話ボックス。中に受話器を持った上地が居る。一方、そこまで遠くはないどこかで、木島がその電話の相手をしている。

上地 彼がいなくなっても自分は生きていけると思うんです。彼がいなくなつてこれまで、普通に生きてきたし。

木島 うん。

上地 ただね、もうこれから、彼ほど情をもてた人に出会うことはおそろくできないと思うんです。でも、生きていくしかないじゃないですか。

木島 ……しかね。

上地 ……海行こうって、約束したんですけど。結局行けませんでした。

木島 うん。

上地 しばらく海行けないなー。

木島 ……。

上地 好きな人ができたのかな。だとしたらさすがに寂しいな。もう、私は一生会えないのかな。

木島 さあ。

上地 ……相変わらずテキトーですね。

木島 そうね。

上地 ありがとうございます、話聞いてくれて。

木島 いいよ、私も楽しいからワインワインだよ。

上地 楽しいんですか。

木島 楽しいよ。

上地 性格悪くないですか。

木島 ……。

上地 あ、すいません。

木島 あなた、そういうところあるよ。

上地 え。

木島 やっぱワインワインじゃない。

上地 え。

木島 うそ。

上地 ……。

木島 いや、なんかね、楽しそうだから。

上地 え、どこがですか。

木島 いや、全然、なんか悪い方向のアレじゃ無くて、なんだろう、これからのこと話してるからさ。

上地 え。

木島 もっとさ、過去の思い出に縋りそうなのにさ、全然。悲しそうだけど、未来のこと話してるから。

上地 ……。

木島 いや、全然いいと思うんだけど、

上地 あなたのおかげですよ。

木島 え。

上地 やっぱ、誰かに話せるって大事なんですよ。

木島 ……嘘つき。

上地 嘘じゃないですよ。割とほんとにそうなんですよ。

木島 解決しないの？

上地 逆にいいの。

木島 何が。

上地 もう、これってどうしようもないというか、また会える感じもしないし、そう思ったら逆にどうにもしくなくていいじゃないですか。

木島 ん。

上地 だから、もう彼は死んだんですよ、私の世界では。……突然だったけど、もうどうしようもないんです。だって私の努力じゃ生き返ったりしないんだから。

木島 ……。

上地 私が気付かず殺しちゃったんですよ、彼を。

木島 そんなことないよ。

沈黙

上地 私、一気に飲み物飲めないんですよ。

木島 うん。

上地 猫舌だから。

木島 そう。

上地 缶コーヒーって途中で飲むのやめれないじゃないですか、ホットとか買っちゃうと飲んでる間にずーっと冷めていくんですよ。でも、私は熱いのが飲めないから飲むまで置いとく。そうすると、あったかいを通り越して、いっつも冷めちゃうんです。

木島 うん。

上地 なんだろうな。うまくいかないな。うまくいかないことばかりだな。
木島 そうね。

間

木島 死んだ人にもう一度会いたい？

上地 ……わからない。

木島 ……そう。

上地 ……生きてる人に会いたいと思う？

木島 ……。

暗転

第19場

朝。深い深い山の中。麓に向かって歩く鈴木。

鈴木 さすがに、遠いな。

間

鈴木 お腹減ったな。

間

鈴木 臭いな、俺。

目の前にポツンと電話ボックス。

鈴木 タクシー……、来てくれるかな。

鈴木、携帯電話を見る。

鈴木 ……圏外。

目の前の電話ボックスに入ってみる。

鈴木 なんか落ち着く。

受話器を取ろうとして手を止める。

間

受話器を取る。

暗転

どこか遠くで電話が鳴っている、
気がする。

（幕）